

厚生労働行政推進調査事業費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）
分担研究報告書

画像レポート未読防止に関する研究

研究分担者：玉本哲郎

奈良県立医科大学附属病院・医療情報部・病院教授

研究分担者：池田和之

奈良県立医科大学附属病院・薬剤部長

研究要旨

奈良県立医科大学附属病院では、2019年の総合医療情報システムの更新時に画像関連のレポート確認機能を実装した。本機能は、電子カルテシステムポータルサイトにシングルサインオンでログインした際、未確認のレポート一覧を表示させる機能で、依頼医師とともに依頼科所属の医師にも通知を表示する。2021年1月から3月のレポートの既読率は約70%であった。今後、未読レポートの定期的にモニタリングを行い、確認を促す仕組みが必要と考える。

A. 研究目的

医療機関での検査後のレポート確認を怠ったことによる治療の遅れ等、患者への影響が発生している。日本医療機能評価機構の医療安全情報では、2012年2月「No.63:画像診断報告書の確認不足」として注意喚起が発せられた。さらに、レポート確認の不備が後を絶たないことから、2018年5月にも「No.138:画像診断報告書の確認不足（第2報）」が発せられている。

そこで当院では、2019年の医療情報システムの更新時に、レポートの既読を管理する機能を導入することとした。

B. 研究方法

2019年5月にシステム更新を行い、総合医療情報システムは富士通製 EG-MAIN-GX を用いて画像情報統合管理システム（VNA）の運用を開始した。VNAは、アストロステージ社 STELLAR を用いている。本導入にあたり、

1, STELLAR におけるレポートの既読確

認システム仕様検討

2, 既読確認システムの利用状況を確認した。

（倫理面への配慮）

本研究は、患者への介入は行わない。さらに各種データも集計データのため個人情報を含む情報は取り扱っていない。

C. 研究結果

1, STELLAR におけるレポートの既読確認システム仕様検討

STELLAR におけるレポートの既読確認システムは、対象レポートを「放射線」「超音波」「内視鏡」「病理」のオーダとし、「心エコー」オーダは対象外とした。読影医によるレポート作成後、「放射線」レポートでは依頼科所属の医師全員に、「超音波」「内視鏡」「病理」レポートでは、依頼科所属の医師全員ならびに依頼医師に通知が送られる（図1）。一方、既読については、依頼科所属の医師が既読とした際は依頼科の通知が、依頼医師が既読とした際は依頼医師の通知

のみが消えるようにした (図2)。

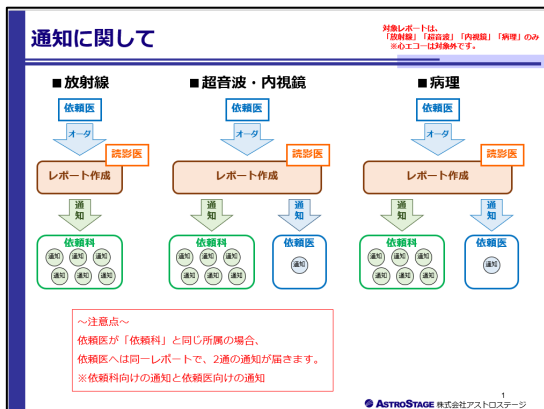


図1. 通知について

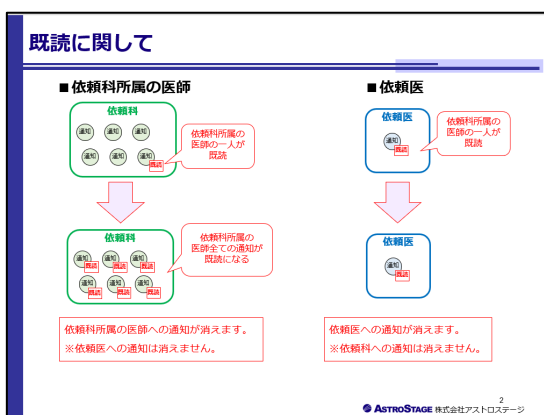


図2. 既読について

この通知システムには電子カルテシステムポータルサイトにログインした際、シングルサインオンでログインし、対象の通知を表示する (図3)。

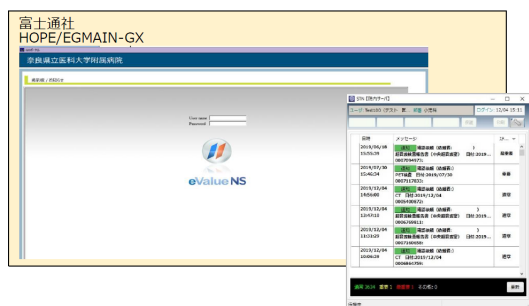


図3. シングルサインオン

また、電子カルテシステムの患者カルテを開いている際には通知も当該患者に絞り込まれる。

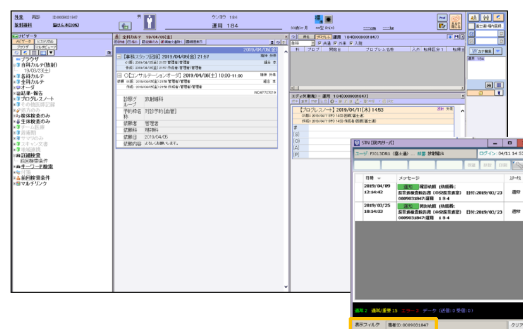


図4. 患者カルテログイン時

なお、この通知画面はログイン情報と通知情報に分かれ、通知情報部分をダブルクリックすると当該通知のレポートが表示される (図5)。さらにこれらレポートは、重要度によって赤・黄・緑に分類し、ログイン時には重要度の高い順に表示するようにした。また、これら通知は未読管理ツールからもログイン者が確認しなければならない文書一覧が確認できる。



図5. 通知画面

2. 既読確認システムの利用状況

本システムの利用情報として、2021年1月から3月までの通知数および既読・三木読、既読率を示す (表1)。

表1. 本通知による既読率

	通知数	既読数	未読数	既読率
2021/1	7,293	5,339	1,954	73.2%
2021/2	7,192	5,284	1,908	73.5%
2021/3	9,160	6,484	2,676	70.8%
合計	23,645	17,107	6,538	72.3%

D. 考察

本システムでは、依頼医師だけでなく依頼科所属の医師にも通知を行うこととしている。さらに、患者カルテの確認時にも当該患者に関する通知が表示し、これら通知は重要度の高い順位に表示するようにした。

これらによりレポートの未読防止に寄与できたと考えられる。一方で通知の既読率は、2021年の調査で70%台にとどまっている。現段階では、本システムを導入し特段大きな運用上の取り組みを行っていない。そのため既読の確認が、オーダの依頼医師による既読が中心で行われていると考えられる。

今後は、患者の来院までにレポートを確認できる運用や未読レポートを定期的にモニタリングするなどレポートの確認を促す仕組みを導入することで既読率の向上ならびに患者の安全確保に努めたい。

E. 結論

当院ではレポート通知システムを導入した。しかし、システム導入のみでは医療安全対策としては十分ではなく、導入した機能を有効に活用するための運用や手順の構築が不可欠である。

F. 研究発表

1. 論文発表

なし

2. 学会発表

なし

G. 知的所有権の取得状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3.その他

なし